

社会福祉法人愛川舜寿会 春日台センターセンター見学会レポート

(2025 年 9 月 17 日開催)

「あらあら、これはどうも遠いところから、、、」

グループホームのリビングスペースで談笑中のおばあさま方が椅子から立ち上がって、深々とお辞儀で出迎えてくれた。

「あ、いや、こちらこそ」

「東京から来ました！」と豪語した、東京駅からレンタカーを借りてやってきた埼玉県民もつられて深々とお辞儀をする。

そんなやりとりをしている後ろ側では、補聴器をつけた男の子が、床に倒れこんでいる。

「暑すぎる、、、もうだめだ」

側にいたスタッフが、そんな男の子に労いの言葉をかけている。

男の子が倒れこんでいる部屋の壁は、全面ガラス張りだ。そちらにふと目をやると、外で遊んでいる子どもたちと目が合った。

「ここは一体なんなのだろうか？」

高齢者施設、放課後等デーサービス、学童、コミュニティーセンター、どの枠組みにもぴったりと当てはまらない。けれど、あちらこちらにコロケの匂いと石鹸の香り、そして「福祉」がプンプン漂っている。この、今まで感じたことのな

い空間に、なんだか心が躍った。

今回、神奈川県愛川町にある、春日台センターセンターに見学に行ってきました。

春日台センターセンターは、グループホーム、放課後等デイサービス、コロケーションスタンド、小規模多機能居宅介護、コインランドリー＆洗濯代行、寺子屋学習支援などが一体となった複合施設であるとともに、地域の人たちが気軽に立ち寄ることができる空間だ。



春日台センターセンター

もともと「春日台センター」という名前のスーパーだったこの場所は 1960 年代から地元の人たちに愛され続けていたが、デフレの波を受け、2016 年に閉店を余儀なくされた。

しかし、スーパーを初め、この商業区域には、なぜか子供たちが集まっていたという。放課後に自転車を走らせ、このセンター前に自転車を並べ、走り回る。お腹がすいたら、コロッケを買い、自動販売機でジュースを買う。子どもたちにとってこの場所は、栄養補給が常にとることができる遊び場だった。

「春日台センターの本質は、そういった元々あったもの、懐かしいものにある」

春日台センターを運営する社会福祉法人愛川舜寿会の馬場理事長は、こう話す。35歳まで表参道のアパレルで働いていた馬場さんは、あるとき、地元の愛川町で開催されていた祭りに訪れた。そこで、大人や子ども、高齢者や障害者、外国籍の人たちがともにその場を愉しむ風景を見て、「この風景を365日作っていくことが、ダイバーシティに繋がるのかもしれない」と思ったという。その場では、異なる背景を持つ人たちの目線が自然と出会い、混ざり合っていた。



社会福祉法人愛川舜寿会理事長 馬場さん

春日台センターには、かつて馬場さんが感じた「人と人が自然な状態で出会う」空間を演出するために、いろいろな仕掛けが施されている。

まず、全面的にガラス張りの窓は、外にいる人と中にいる人との目線が出会うようになっている。目線と目線が出会うことで、人は知らず知らずのうちに相手に関心を寄せてしまう。そして、施設の至る所に張り出している縁側は、コロケを買いに来た人がイートインできる場所であるとともに、走り回る子どもたちや外を散歩する高齢者の方たちが、自然と腰を下ろしたくなる場所でもある。それまで交流がなかった人たち同士でも、横並びに座るとなんだか話がしたくなる。また、この施設には「静かにしましょう」といったような禁止事項が書かれ

た張り紙が存在しない。これは、そこに来た人たちに、禁止事項がなかったとしても「ここではしてはいけないこと」を感じてもらうためだという。



春日台センターには、たくさん子どもたちが集まる

「オーガニックな空間を作っていく。いかに人が自然の状態でいられる空間をつくっていくか。その中でいかに混ざり合っていくか。世代が変わっても、人は人を求めているものなのだと思う。」

そんな馬場さんの言葉を聞いて、「なんだか即興劇の舞台の上にいるみたいだ」と思った。支援者、障害者、高齢者、子どもたち、いろんな人がそれぞれの役割をもって、この春日台センターという舞台の上で演じている。けれども、

それが息苦しく感じない。皆がそれらを「共に愉しんでいる」空間に、僕らもまんまとハマってしまったのだと思う。

そんな空間からの帰り道だったからだろうか、帰り車の中は、テーマパークから帰路のような雰囲気になった。お土産のコロッケを食べながら、自分が好きだった駄菓子についてひとしきり話が盛り上がった。



お忙しい中、最初から最後まで馬場理事長がご案内してくださりました！
ありがとうございました！

東京 TS ネットコアメンバー

宇都宮 志保